

都市農業にみる協働

——有機農業運動との比較から——

静岡文化芸術大学

船戸修一

1 目的

本報告の目的は、首都圏における「援農ボランティア」——市民（非農家）が農家の農作業を補助支援する活動——の事例を踏まえ、都市農業における協働の現況を明らかにすることである。そもそも「援農」は、日本の有機農業運動において消費者が生産者を支える活動として語られてきた。しかし、昨今、首都圏では、都市農業者の高齢化に伴う人手不足の支援として「援農ボランティア」の活動が盛んになりつつある。そこで本報告では、援農ボランティアへの調査を踏まえ、都市農業における「援農」を有機農業運動との比較を通して、都市における協働の現況を明らかにする。

2 方法

本報告では、首都圏、とりわけ町田市・八王子市など主に多摩地域で行われている「援農ボランティア」をとりあげる。多摩地域での援農ボランティアは、2000年代前半から始まり、現在、ほとんどの自治体で見られている。

3 結果

援農ボランティアに参加する市民は、自らが「食べる」農産物を生産する農家を支援するために「援農」を行っているわけではない。むしろ、その関係性から切り離された形で都市農家の農作業を助けているという意識が強い。また、援農ボランティアの中には、受け入れ農家の農産物の集荷や出荷作業を手伝う市民もいる。このように、現在、都市農業における援農活動は、「生産」現場を越え、「流通」や「販売」という領域まで拡大している。さらに、援農ボランティアたちだけで耕作放棄地を耕し、そこで生産された農産物を販売する動きも見られている。以上のように、有機農業運動に見られた「援農」とは異なる協働の現況が生まれている。

4 結論

これまで生産者（農家）と消費者という関係性については有機農業運動において「提携」という文脈で分析されてきた（榎瀧・谷口・立川編，2014）。この「提携」を支えるために、食の安全を求める消費者は、それを生産する農家の農作業に「援農」という形で参加していた。しかし、首都圏の農業現場で見られる「援農」は、必ずしも「食べる」関係で結ばれた協働ではない。ここに農業をめぐる新たな協働が見いだされる。

文献

榎瀧淑子・谷口吉光・立川雅司編，2014，『食と農の社会学:生命と地域の視点から』ミネルヴァ書房。